



HACK

8

悪夢

KAI SHIGIHARA



## 8.悪夢

---

### 8 悪夢

翌日。

朝から早速、レスリーは同僚の女性たちに囲まれてしまった。

「白状しなさいよ、レスリー。昨日のあのナイトは誰よ」

昨日、ジュリアスに会った同僚が中心になって、なんだかとてもかましい。

「それで？ 彼とお付き合いしちゃってるの？ そうなんでしょ？」

興味深々という視線視線視線……。これで否定しても、信じてもらえないだろう。幸い、一応、昨夜からお付き合いが始まったので、嘘をつく必要もないけれど。

「ええっと、まあ、一応」

「えー！」

「やっぱりー！ 素敵、美男美女ね」

ジュリアスのことを聞かれても、レスリーが苦笑して首を横に振るだけなので、彼を目撃した同僚へと矛先が向いた。

どんな男性だったのか、レスリーとどれほどお似合いだったのかという話で、とても盛り上がっている。

ジュリアスはとても素敵だ。特に昨夜のジュリアスは、ちょっと憂いのある表情に、スーツとコートがとても似合っていて、女子がきゅんとなるような素敵さだった。そんな素敵なジュリアスが、具合を悪くして弱っているところに、何の予告もなく現れて抱きしめてくれたのだから。

（普通、それで惚れちゃうわよね）

お付き合いという言葉にアレルギー反応は残っているけれど、この先、ジュリアスまでストーカーになったらどうしようとか、そういう恐怖も消えないけれど、今はジュリアスと会いたいと思う気持ちの方が強い。ジュリアスは怖がっているレスリーの気持ちも理解してくれたし、ゆっくりでもいいとも言ってくれた。それなら、レスリーだって勇気を出して、一歩前進しなければならない。カウンセラーはそう言ってたし、レスリーだってこのままでいいなんて思っていないのだから。

「レスリー、ちょっと」

「はい！」

二中隊長が、ドアの向こうからレスリーを手招きしていた。レスリーが答えると、そのまま隊

長室へと入っていく。レスリーにも来いということだろう。

「ドミニクから話は聞いている。本当にいいのか？ 一中隊は激務だぞ」

やはりというか、二中隊長の話は、一中隊への異動のことだった。

「はい。頑張ります」

「一中隊は曲者ぞろいだ。優秀な連中ばかりだが、一癖も二癖もあるような奴らばかり揃っている。その筆頭が、隊長のドミニクだな。優男の外見に騙されるなよ。あの若さで一中隊長やってるのは伊達じゃないからな」

「心しておきます。ありがとうございます」

二中隊長は、五十代のおっとりとした人で、ドミニクのようなカリスマ性はないが、とても有能で部下からの信頼も厚い。この隊長の下で、レスリーはこの二年弱、ゆっくりしっかりと仕事を覚え、社会人として一人前に育ててもらった。ありがたい、恩人の一人だ。

「引き継ぎは今日中にすませて、明日からは一中隊へ異動するように。頑張れよ、レスリー」

「色々ありがとうございました」

この二年のことが思い出されて、ちょっぴりじんとしてしまった。

だが、すぐの朝礼で、レスリーの異動が発表され、激励やらやっかみやらで、たくさんの人に声をかけられ、引き継ぎもやらなければで、あまりに忙しくて、思い出に浸ることも出来なかった。ようやく、引き継ぎの目途もついて、周囲にもレスリーの異動が知れ渡ったのは、お昼も過ぎてからだった。

自分のデスクでコーヒーを飲みつつ、レスリーは引き出しの奥に入っている、盗撮写真の束のことを考えていた。

昨日はあまりに突然で、心の準備もなく、昔のことを思い出してパニックになってしまった。机の引き出しにしまいこみ、なかったことにした。逃げ出したのだ。

だが、怯えて逃げるのは、よくない。きちんと向き合って、対処しなければ。

二年前だって、そうやって対処した。対処できたからこそ、抜け出すことが出来たのだ。二年前の自分に出来て、今の自分に出来ないはずがない。

(大丈夫！)

あの写真の束は、ドミニクに報告して見せる必要がある。レスリー個人への何かではなく、あの任務への何かかもしれない。バカンスに隠れて何かしていただろう、知っているぞという脅しなのか、そうでないのか、まだわからない。

(……明日でいいよね、見せるの)

明日は一中隊に異動する。レスリーのデスクは一中隊のオフィスに移動するし、ドミニクに会う機会もあるだろう。

それに、どうやら今日は、ドミニクは外出していない様子だ。

(ジュリアスにも、話さなくちゃ)

昨日はとても話せるような状況ではなかった。ストーカーのことは話したので、その流れで盗撮写真のことも話して、昔を思い出して怖かったと言えばよかったのだが、そこまで頭がまわらなかった。

(今夜も会うから、その時に話そうかな)

だが、これは仕事のことだから、ジュリアスより先にドミニクに話すべきかもしれない。ジュリアスはもう正式に軍を除隊したのだから。

(だよな。今夜は、ジュリアスの話を聞きたいし)

ドミニクがちらりと言っていた、ジュリアスの二年。二年前、ジュリアスにも何か事件があったのだろう。それはきっと、当時、一緒に働いていたアンテナ役の誰かとの、事件かトラブル。それが原因で、ジュリアスは二年もの間、世捨て人のような生活をしていたらしい。

レスリーがきっかけで、彼は俗世に戻ってきたとドミニクは言っていたが、そこらへんの真相も聞きたい。

(ジュリアスのこと、もっと色々知りたい)

たくさん知って、彼への理解を深めたい。それは、信頼へとつながるような気がする。

「レスリー、郵便物です」

大量の郵便物を乗せたカートを押しながら、配達係の若い女性がレスリーにいくつかの郵便物を差し出してきた。

「ありがとう。あ、私、明日から一中隊に異動なの。よろしくね」

「了解しました！」

同じ第一大隊なので、オフィスのフロアは一緒だ。同じフロアの郵便物はすべて彼女が配達してくれているので、声をかけておけば転送してもらえる。

何気なく郵便物を広げたレスリーは、封書なのに高額な宅配で届けられた郵便物に、差出人がないことに気がついた。そっと大きく息をつき、ハサミを使って慎重に開ける。

(決定的ね)

中に入っていたのは、昨日と同じく、盗撮した写真。数はそれほど多くない。十枚ぐらいだ。

そのすべてに映っていたのは、昨日のレスリーとジュリアス。守衛所の前で肩を抱かれているところ、ジュリアスの車に乗り込むところ、路駐した車内で話をしているところ、そしてキスしている写真は、二つに切り裂かれていた。

指先は冷えてきたし、こめかみのあたりがズキズキしてきたが、昨日よりずっと冷静であることを自覚していた。

これはもう、仕事がらみではない。ドミニクに話す必要もなくなった。

(大丈夫。心の準備は出来ている)

レスリーは写真を封筒にしまうと、デスクから手帳を出す。アドレス帳から、二年前にお世話になった弁護士の電話番号を見つけると、躊躇なく電話をかけ始めた。

約二年ぶりの、カミラのオフィスは、何も変わっていなかった。仕事に追いまわされて、オフィスのインテリアなどには構ってられないのだろう。清潔で、でもどこか雑然としていて、居心地のいいオフィスだった。

「お待たせ、レスリー。久しぶりね」

外出していたカミラは帰ってくるなり、両手を広げて、レスリーをぎゅっと抱きしめてくれた。体格がよく、親子ほど年齢の離れたカミラにハグされると、母親に抱きしめられたようで安心できた。二年前、カミラはレスリーにとって大切な味方の一人だった。カミラが居てくれたから、あの裁判を乗り越えることが出来た。心から信頼している人だ。

「会えて嬉しいけど、うかない顔をしてるわね」

「それでも、自分では結構まともな顔をしていると思っているのよ？」

「あなたは強くなったわよ、レスリー」

「そうだといい」

ぎゅっと抱きしめあい、体をはなすと、目と目が合って微笑みあった。

「忙しいのに時間をあけてもらって、ありがとう」

「どういたしまして。待たせてごめんなさいね。さあ、早速、見せてちょうだい」

カミラは、レスリーが座っていた三人掛けソファの隣に腰を下ろすと、そう促した。向き合っ  
て座らず、隣に座るカミラに、二年前と変わらない親密さを感じて、レスリーは嬉しく頼もし  
く思った。

「昨日と、今日、届いたの」

テーブルに写真の山を二つ作る。カミラは昨日届いた大きな山の方から手にとって、一枚ずつ  
丁寧に見て行った。

「ねえ、まずは、お祝いを言わせてよ。恋人が出来たのね」

「まだ、お付き合いを始めたばかりで、恋人と呼べるかどうか」

「彼は事情を知っているの？」

「大体はね」

「とっても素敵な人じゃない。優しそう、それにカンがいい人？」

「え、そうね、多分」

人間相手は苦手だと言っているが、あれだけの異能力を持つ人だ。当然、カンはいいだろう。

「どうして？」

「盗撮されているのに、カメラ目線の写真が多いもの」

と、カミラは見ていた一枚をレスリーに差し出した。レストランで食事をしている二人の姿が  
、望遠レンズの性能ぎりぎりですらとられたのだろう、ちょっとぼけている写真。ジュリアスの視線  
はカメラの方を向いていた。

「……偶然？」

「人の視線に敏感な人はいるものよ。カメラに撮られているまで気付かなくても、視線には気付  
くものよ。面白い。彼がカメラの視線に気づくと、撮影するのをやめてるっぽい」

レストランの二人を撮影した写真は何枚もあるが、最後に撮影したのがカメラ目線の写真だ  
った。日付と時刻が印字してあるから間違いない。

「無意識に盗撮者を撃退してるじゃない。頼もしい彼ね。ここは、レイノックス？」

「ええ。詳しくは話せないんだけど、仕事で行ったの」

「彼は同僚なの？」

「元、同僚かな」

「二週間後にこの写真が届き、今日届いたこれは？」

「昨日の私たちなの」

「加速してるのね」

最後に、キスをしている写真が切り裂かれているのを見て、カミラは眉をひそめる。

二年前、父親の決めた婚約者と結婚しようとした時も、同じ様に切り裂いた写真を送ってきた

。

「ケビンだと思うの」

「そうね。私もそう思うわ」

「彼、今どうしているのか調べてもらえる？」

「勿論よ。この差出人も探してみるわ。ケビンが出したのものなら、接近禁止令に違反したことになる。逮捕できるから」

「ありがとう」

「急いでやらせるわ。あいつじゃないとわかるまで、あなたも用心しなければだめよ。今、実家から通っているの？」

「いいえ。セキュリティーのしっかりしたマンションに一人暮らし。これ、住所ね」

用意してきたメモをテーブルに置く。カミラは心配そうな顔でそれを手に取る。

「ちょっと遠いのはわかってるけど、今は実家に帰ったらどう？」

「ケビンのために自分の生活を変えるのはいやなの」

「気持ちはわかるけど、あなたに何かあったら心配だわ。彼氏に泊りにきてもらうとかは？」

「ジュリアスとはまだそんな関係じゃないから」

「ジュリアスっていうのね、彼。何をしている人？ 事情をどこまで話しているの？」

「カミラ。彼を巻き込むつもりはないの。これは、私の問題だもの」

「何言ってるの！」

がしっと、カミラに手を握られる。ぐいっとひかれて、カミラのほうへ体が傾いた。

至近距離で、カミラに睨まれる。

「こんなものが届いたのは、あなたに恋人ができたからでしょう？ あなただけの問題じゃない、彼にも関係あることじゃない。ちゃんと話して、助けてもらわないと駄目！」

「……そんなことしたら、ジュリアスまでケビンの標的になっちゃうかも」

「すでになっている可能性もあるわ」

「……」

「彼にも注意してもらわないと。だから、ちゃんと話したほうがいいのよ。レスリー」

「ええ、そうね」

カミラを納得させるためだけに、レスリーはそう答えた。だが、そんなこと、カミラにはお見通しだったらしい。おもいきり顔をしかめ、わざとらしくため息をつかれた。

「なんなの。男に頼るのがいや？ 恋人でも信用出来ない？ 自分の面倒は自分で見れなきゃ生

きていけないとでも思ってる？」

それ全部正解だと思ったが、何も答えず、肩をすくめておいた。

「言ったわよね。ケビンみたいなサイコ野郎は、世の中そうそう転がっていない。あなたがケビンの本性を見破れなかったのは、あちらの方が一枚上手だったというだけで、あなたが愚かだったというわけでも、サイコ野郎に魅かれちゃう体質だからでもないって」

「ジュリアスも私より一枚上手なのかもよ？」

「自分をもっと信じてやりなさい、レスリー。この先、一生一人で生きていくつもり？」

「……まだ二年よ、カミラ。たった二年なの。私、ケビンと一年付き合っ、接近禁止令をもらうまで、別れてから一年以上かかっている。まだ、たった二年なの」

「レスリー」

「カミラに言われたことは、ちゃんとわかってる。私が間違っていることも、わかってる。でも、怖い。怖いよ」

「レスリー、レスリー、ごめんなさい」

言いすぎたわと、カミラはレスリーを抱きしめてくれた。彼女が言いすぎるのは、本当の母親のようにレスリーを心配してくれているからだ。そして、有能で経験豊かなカミラの意見を、レスリーはいつもありがたく聞いてきた。自分が全く信じられないでいた時、カミラはレスリーにとって大切な助言者だった。

「今度、ジュリアスを連れてきて。私がちゃんと見てあげるから」

「……ありがとう、カミラ」

レスリーはカミラの肩に、涙があふれてきた目をきゅっと押し当てる。カミラは優しくレスリーの背中をさすってくれた。

カミラの雇っている探偵はとても優秀だ。明日また必ず連絡すると約束してもらい、レスリーは安全な自宅へと帰った。

一人暮らしを続けると主張したレスリーのために、父親が用意してくれたマンションは、最新のセキュリティーで守られている。エントランスには常に管理人がいて、目を光らせている。オートロックのエントランスを住人にくっついて通り抜けようとしても、郵便ポストに配達員以外の誰かが何かを投函しようとしても、管理人に見とがめられるということだ。

完璧なセキュリティーに、レスリーのような一人暮らしの良家の女性が多く入居していた。

シャワーを浴びて、部屋着に着替えると、レスリーは大きなカウチソファで丸くなった。リモコンでテレビをつけると、ドラマのチャンネルにあわせる。見たこともないドラマだったが、田園風景が美しく、登場人物たちが静かに会話しているのが気にいった。とにかく、無音なのがいやだった。

すでに標的になっている可能性がある、カミラに指摘された。その通りだと思えた。思ってもみなかったけれど、ケビンはジュリアスに危害を加えるつもりかもしれない。

二年前、ケビンに付きまといわれて心が弱っていたレスリーは、見かねた父親の強引なすすめで

、お見合い相手と結婚することにした。相手の男性とはほとんど面識はなく、当然恋愛感情などなかった。だが、家柄も血筋も学歴も、性格だって、周囲の人々が保証してくれた。だから、安心だった。ケビンから逃げられるとも思った。

だが、ケビンはレスリーが結婚することを許さなかった。ストーカー行為はエスカレートし、結婚相手の家にも脅迫電話がかかってくるようになった。結局、相手のほうから破談にしてほしいと連絡があり、結婚は駄目になったが、この時の迷惑行為でケビンを裁判に引きずり出し、接近禁止令をとることが出来た。

もしまた、ケビンが二年前と同じことをするのなら、ジュリアスに対しても何かする可能性は大いにある。レイノックスでは、二人で同じコンドミニウムに泊っていたし、昨日は車中でのキスマで見られている。お見合い相手とは、手をつないだことだってなかった。それなのに、破談になるぐらいの嫌がらせがあったのだ。ジュリアスに何をするのか、想像も出来ない。

(ジュリアスは強い人よ)

彼の父親は軍司令官だし、兄は一中隊長だ。自宅のセキュリティーはしっかりしているだろう。

(でも、ちゃんと警告しなくちゃ)

それが、ジュリアスを巻き込んでしまった自分の最低限の義務というものだ。

(でも、でも、)

話したくない。ジュリアスに、自分の愚かな過去を話すのが怖い。彼の反応が怖い。軽蔑されるかもしれない、面倒な女だと嫌われるかも。

それとも、ケビンに怒ってレスリーを守ろうとしてくれるかも。彼と、彼の家族まで巻き込んで、ケビンをなんとかしようとしてくれるかも。

(私、どちらでも嫌なんだ)

嫌われるのは、勿論いやだ。でも、守られることで、彼に依存し、彼に全てをゆだねることもいやだ。だって、そうなってから裏切られたら？ 彼もサイコだったら？ ケビンのときのように、立ち向かって勝てるだろうか。勝ち負け以前に、もうボロボロになって、戦うことさえ出来なくなるような気がする。

この先、一生、一人で生きていくなんて寂しい。信頼し愛している人と、一緒に生きていきたい。

そのためにも、愛していると言ってくれるジュリアスを信じたいし、彼を思う自分の気持ちときちんと向き合いたい。ジュリアスとの関係を深めていきたい。

頭ではそう思っている。でも、心はそう簡単に割り切ることは出来ない。

二年かけて、ようやく昨日、一歩前に進むことが出来た。ようやく、一歩だ。

それなのに、今日、全速力で走ってゴールまですぐに行けと言われても、不可能だ。

(レスリー)

頭の中でジュリアスの声がして、レスリーはぎょっとして飛び起きた。

(驚かせてごめん。部屋にいるね?)

「ジュリアス……どうして」



(それを聞きたいのは俺の方だけど?)

怒ってはいない、苦笑まじりという感じの思考が流れてくる。彼は多分、近くにいる。

「あ、ごめ、待ち合わせ」

今日は夕食を一緒にする約束だった。すっかり忘れてしまっていた。

慌てて時計を見れば、もう夜九時を過ぎていた。約束は七時だったというのに。

(体調悪い? 何かあった?)

「ごめんね、何も、ないの」

こんなの、嘘だってジュリアスにはすぐわかる。言いながら、レスリー自身、下手な嘘だと思っているし、嘘ついてごめんなさいと思っているのだから。

だが、ジュリアスには、レスリーの嘘がわかって、何を隠しているのか、本当のところはなんなのか、レスリーの心の奥をのぞくことは出来ない。

「今日は食欲がないの。ごめんね」

(少しだけ会うのも駄目?)

「ごめんなさい。もう、眠りたいの」

最低だ。約束をすっぽかして、顔もみせなくて。

「本当にごめんなさい、ジュリアス」

(いいよ。急がないって、昨日、話したじゃないか。今日はもう寝て。明日は会える?)

「.....うん、会いたい」

会わない方がいい。どこかでケビンが見ているかもしれない。ケビンを刺激するのは避けたほうがいい。でも、.....会いたい。

やらなければならないこと、やりたいこと、やってはいけないこと。頭の中がぐちゃぐちゃで気が狂いそうだ。

時間がほしい。間違わないように、一步一步確認しながら前へ進みたい。でないと、怖くてたまらない。

(愛しているよ、レスリー)

「.....うん」

(泣いてるの?)

「ううん」

(会いに行ったら駄目かな)

「ごめんなさい、ジュリアス。また、明日ね」

(わかった。おやすみ)

「おやすみなさい」

(いい夢を)

そう言ってくれたジュリアスの思考は、とても優しかった。

彼は少しも怒っていなかったし、会おうとしないレスリーに焦っていたりしなかった。だから、レスリーのささくれ立った気持ちも、ちょっとだけ穏やかになって、眠りにつけた。

その夜みたのは、ケビンに追いかけて、ジュリアスの腕の中に逃げ込む夢。  
しっかり抱きしめられて深く安堵して顔を上げたら、抱きしめていたのはジュリアスではなくケビンだったという、最悪な悪夢だった。